

# SIR2004 印象記

## 山本清誠

奈良県立医科大学 放射線科

このたび日本血管造影・IVR学会におけるトラベルフェローシップを利用する機会を与えて頂き、本年3月25日から30日にアメリカ・フェニックスで行われたSIRへ参加することができました。

海外学会へは今までにいくつか参加しましたが、IVRを志す者として、やはりSIRは非常に楽しく参加するたびに「是非来年も」と思う学会であることを感じます。今年のSIRでは特にUAE、RFAおよびvertebroplastyが印象に残りましたのでこれらについて述べたいと思います。

まずUAEですがやはり塞栓物質として何をを用いるかや塞栓の程度をどれぐらいにするかなどが話題になっていました。なかでも済生会滋賀病院の勝盛先生がゼラチンスポンジを用いたUAEの発表をされており、ゼラチンスポンジ細片の作り方から塞栓の程度、さらに治療成績など細やかな研究成果を発表され日本から発信する研究のひとつとして輝いていたように思われました。UAEは女性生殖器の疾患に対する治療であることも相まって、ワークショップでは術後のケアや外来診察などに関して女性のIVRistが熱心に議論しておりIVRの基本である診断から治療までを改めて体感しました。

また日常診療において携わることの多い肝腫瘍、中でも肝細胞癌に対する治療ではRFAの報告が多く見られましたがプレナリーセッションにおいてTAEの発表もありました。アメリカからのTAEの報告では塞栓物質の選択や塞栓方法など日本とやや異なる点がありますが肝癌患者の増加と治療のひとつとしてTAEの関心が高まっていることが実感できました。最近日本ではTAEに関するスタンダードデザインの構築とその有用性をいかに導き出すかが話題となっていますが、肝細胞癌に対する治療においては韓国からも素晴らしい成果を報告しており、技術的な側面や治療成績など日本でのデータを再度見直して形ある物にし発信することの重要性を感じました。

さらにvertebroplastyにおいてはその有用性をはじめ治療成績が報告されていましたが今回目を引いたのはkyphoplastyでした。Kyphoplastyは圧迫骨折によって生じた椎体の変形をバルーンで整復した後、これによりできたcavityにセメントを注入するという方法ですがvertebroplastyと比べ手技が煩雑で合併症の頻度も高いという報告もあり印象としてはvertebroplastyに軍配が上がる感がありました。そのvertebroplastyですが、今回私はワークショップに参加し講師の先生の講演を聴いた後、模型を使って実際の手技の講習を受けました。我々は日常診療においてCTガイド下で穿刺、セメント

の注入を行っていますが講習ではX線透視のみで穿刺からセメント注入までをいとも簡単に行っており非常に驚きました。

最後に機器展示のブースでは新しいデバイスの展示がたくさんありましたが一つだけ紹介したいものがあります。それは血管造影のスキルアップを目的に作られたシュミレーションツールです。人と同じぐらいの大きさの人形の鼠径部からシースとカテーテルが、挿入されており、透視画面(コンピュータの画面)を見ながらカテーテルを回したり押したりするとその通りに画面上のカテーテルが動くという代物で実に良くできており、こういう機器が身近にあればIVRの上達も早くなるのではないかと思ってしまうほどでした。

今年も世界各国のIVRistの様々な研究に触れることができこの学会が自分自身の研究に対するカンフル剤になった様な気がします。学会期間中はホテルと会場を徒歩で往復していましたが照りつける日差しや砂漠とサボテンの風景にフェニックスを満喫しつつ次回のSIRにも是非参加したいと思い帰途に就きました。



中央右側が吉川教授，左側が筆者。